奈良大学四〇年間をふりかえって

植野浩三

はじめに

瀬戸内海に面した静かな田舎町で育った筆者は、自然に恵まれた山野を駆け巡り、海を庭にして遊ぶことが日課であった。小学校は一学年三六人の小規模な学校で、クラスメートは六年間変わることはなかった。いたずら好きの少年だったようで、今でも会うたびに責められる。中学校代は勉学よりもバレーボールに励んで過ごした。スポーツ好きの一方で、なんとなく神社や寺院が好きで、村祭りや盆踊りは楽しみの一つであったし、二〇キロも離れた隣町（本郷町）の御年代古墳や梅木平古墳へ自転車で訪れたこともある。

高校時代には早々にバレー部を辞め、いつの間にか郷土研究部に入っていた。心の片隅に歴史への興味があったのだろう。夏休みには先輩達と一緒に自転車で地元（竹原市～安芸津町）の社寺や史跡を巡ったり、土曜の午後や休日には近隣の文化財を見学して回った。「足で学ぼう」がクラブのスローガンであった。現在は重要伝統的建造物群保存地区に指定されている「たけはら町並み保存地区」内にある頼惟清旧宅（竹原市指定文化財）の清掃作業は、クラブの伝統的な行事であり、学期に一度は訪問した。とは言っても、半分は遊びながら敷地内を適当に清掃していた。

こうした活動は、顧問であった太田雅慶先生の指導であった。太田先生は地理の教科担当であったが、歴史好きが講じて郷土史研究会の代表をされていた。日本城郭大系や広島の歴史シリーズ等、たくさんの執筆・著書がある。事あることに古墳や社寺、さらに山城、武家屋敷跡、中近世の墓地、塩田跡等に案内していただいた。また、何も分からない高校生を、毎月開催される郷土史研究会の例会に参加させていただき、研究の雰囲気を味わうことができた。

私の歴史への興味は、この時にできあがったと言える。先生に出逢わなかったら別の道に進んでいたかもしれない。高校卒業後も帰省の折にはお宅にお邪魔し、叱咤激励をいただいた。先生は根っからの愛飲家であり、お酒が入ると必ず「一生が勉強じゃ、のう植野君」が口癖であった。その名文句は、お亡くなりになるまでおっしゃっていたし、今でもお顔が浮かんでくる。

高校卒業後の進路については悩んだ。卒業後も地元に残って、太田先生達の研究会に参加して活動しようかと真剣に考えた。たまたま受験した国家公務員初級の試験にも合格していた。亡き父は「もったいなかった」と最後まで言っていたようである。そんな時に中学校の先輩が、「大学での経験は人生にとって大事。行っておきなさい」という言葉に影響を受け、同級生よりかなり遅れて大学探しと受験勉強を始めた。

一、あこがれの奈良

歴史の勉強をするのなら奈良か京都にしようと決めた。結果的に奈良大学文学部史学科（六期生）に拾ってもらい、奈良での学生生活が始まった。入学時には専攻を決めていたわけではなかった。たまたまキャンパスでクラブの勧誘が行われており、「考古学研究会」の案内が目にとまった。発掘に行けるという誘い文句に引き込まれて入会した。奈良大学は開学六年目であったため、クラブの歴史も浅い。考古学研究会はその母体の歴史学研究会（考古学部会）から独立した年であった。早速、六月頃に福井市糞置荘の発掘調査に二週間ほど参加した。初めての調査は感激の連続であったが、夜は進められるままに飲み過ぎて、翌日動けなかった汚点も残した。

入学した年度は、奈良大学に考古学の教員として田辺昭三先生が赴任された年であった。この偶然がまた筆者の将来を決めたと言ってよい。専門課程では、指導教員の研究を学ぼうと須恵器の研究史をまとめた。これが私の専攻になったのは自然の成り行きである。卒業論文は「西日本の初期須恵器」であり、中四国の初期須恵器を集成した。広島大学や広島県教育委員会、山口県埋蔵文化財センター、香川県教育委員会等を訪れて資料調査をして実測を行った。卒業論文では、必ず自分で実測して製図するのが必須条件であった。

学生時代の四年間は、田辺先生が主導された発掘現場を駆け巡り、調査の基本を学んだ。一回生の初現場もそうであったし、吉田片山遺跡、中臣遺跡、平安京跡、吉田南遺跡、池上口ノ池遺跡の調査に参加した。四回生の時には、教育実習でもお世話になった関係上、恩師の太田先生が団長をされていた竹原市小梨城跡の調査に加わった。

田辺先生は、「新生の奈良大学卒業生が生き残るには、発掘調査の技術と遺物観察（実測）や製図の技術習得が不可欠。それだけは他大学に絶対負けるな。そのつもりで頑張れと」厳しく指導された。先輩からは土器の実測図は二〇〇個描いて一人前といわれ、目標達成に仲間達と頑張った。最初は面倒くさい作業であったが数多く描くうちに楽しくなっていった。

卒業後は、学生時代から参加していた神戸市池上口ノ池遺跡（低丘陵上に立地する弥生時代から古墳時代の集落跡）で調査員として二年間、発掘調査および整理（報告書作成）作業に従事した。この期間がとても充実した時間であった。遺跡の調査と整理作業の実践は、学生時代の経験に加えて、さらに自信を与えてくれたのである。

また、休日のほとんどは京都市にある平安高校に通い、同校で保管されている陶邑窯の基準須恵器の実測に没頭した。毎週の休日が楽しみで仕方なかった。同校教諭の萩本勝先生は、陶邑窯の調査にも参加されており、須恵器研究の第一人者でもあった。基準須恵器の特徴や観察方法等を一から教示いただき、研究の成果や問題点等も議論した。毎週新たな発見があり、かけがえのない時間であった。私の研究の基礎はここにあるといえる。

その頃であった。田辺先生から今度、奈良大学で新しい学科を作るので、二、三年奉公してこい、というお誘い（指令）があった。文化財学科である。文化財学科は、当初は一年早く（一九七八年度）開設する予定であったが、財政面が不鮮明であると言うことで一年延ばしになった。さらに、文化財学はどんな学問なのか、どんな体系なのか、就職はあるのか?、等々、様々な詰問をされたという。最初は、考古学を基本とした文化財学科を構想していたが、作るのなら美術史や文化史の教員、助手も必要と、新生大学の弱みにつけ込み、難題を押しつけられたという。しかしその後、奈良国立文化財研究所等の助言もあって、やっと開設の認可がおりたと聞く。しかし、学科の構想を練っていた田辺先生は退職し、水野正好先生が着任することになる。

二、再び宝来キャンパスへ

文化財学科は、すでに在職していた山中一郎先生（考古学）と他の二教員（美術史・化学）に加えて、文化財学科の発展に尽力された水野正好先生が一九七九年度に赴任されてスタートした。残りの五名の教員は次年度に着任し、合計八名のスタッフが揃った。それまでの大学（考古学）の事情や卒業生の情報に詳しいということで、筆者も助手として採用された。

一九八〇年度に再び宝来キャンパスに戻って以降、毎年長期休暇には発掘調査に出掛けた。文化庁から転任された水野先生のもとには、発掘調査の応援依頼が数多く寄せられていた。赴任された一九七九年度には、和歌山県道成寺の調査を行われている。筆者は翌年に鳥取県東伯町（現琴浜町）三保遺跡、次年度には同県大栄町（現北栄町）瀬戸・西穂波古墳群の調査をした。水野先生は「行政で就職するためには、迅速に予算内で成果をあげる」ことが大事であると述べられ、学生の指導も徹底されていた。バブル時代には、奈良県内でも多くの造成が計画された。奈良大学では県・市の要請をうけて、水野先生を中心に十五ヶ所以上の調査を行い、筆者も二ヶ所の調査を担当した。

一九八〇年代には、鳥取県以外にも兵庫県中町（現多可町）多可寺遺跡、香川県綾歌町（現丸亀市）地神山古墳群、和歌山県海南市山崎山古墳、長野県豊科町（現安曇野市）東山窯跡群の調査で各地を訪れた。東山窯跡群の調査は、一九八七年に田辺先生が代表者となり、地元の研究団体に加えて、明治大学（小林三郎先生）、國學院大學（吉田恵二先生）、立正大学（池上悟先生）に調査の応援を求め、奈良大学も参加した。最盛期には一〇〇名以上の学生が集結した。各大学は情報交換をしつつ、割り当てられた窯跡の調査に明け暮れ、学生達は夜な夜な交流を深めていた。奈良大学からは一〇名ほどの学生が参加し、四基の窯跡を調査した。複数大学が参加した調査は非常に珍しく、貴重な体験になった二ヶ月であった。

三、山陵キャンパスへ移転

奈良大学は、一九八八年に通い慣れた宝来キャンパスから山陵キャンパスへ全面移転をし、新たに社会学部を増設してスタートした。できたての研究室や講義室、そして実習室・資料室の配置や使用方法の調整は楽しく、フレッシュな気持ちになったものである。

一九九二年度から五年間に亘って、兵庫県氷上郡（現丹波市）内の埋蔵文化財の分布調査を行った。冬休みと春休みを利用して、十名ほどの学生達と合宿をして、市内の悉皆調査を行った。厳寒の中を歩き回り、時には積雪で孤立状態になったこともある。夜は採集遺物の登録作業、ミーティングをし、定期的に懇親会を開催して学生達と楽しく過ごした。その縁があって、旧氷上郡青垣町ボラ山遺跡の発掘調査も実施した。

その他、滋賀県虎姫町（現長浜市）五村遺跡、鳥取県淀江町（現米子市）晩田山古墳群、奈良市歌姫赤井谷横穴の発掘調査も実施し、重要な成果をおさめた。元気な学生・院生達と一緒に遺跡の性格について考え、活発な議論をし、大いに刺激を受けた。

遠方での調査は宿泊がつきものであり、学生達と寝起きを共にした。一ヶ月以上におよぶ調査もあり、個人個人の性格や長短所が見えてくる。皆いい長所をもっていた。当時は若かったこともあり、後輩の学生と一緒に学び、一緒に遊びながら過ごした。今でもそのつながりは続いているように思う。

山陵キャンパスに移転して以降、文化財関係の学会・研究会の開催が増えた。ほとんどは水野先生の請負いであるが、その都度、会場整備や会の進行、懇親

会の準備等を担当した。日本文化財科学会は奈良大学に事務局を置いた関係上、一九八五（宝来）、一九八九、一九九一、二〇〇一年度に大会を行い、最近では二〇一六年度にも会場になっている。日本考古学協会の大会は一九九二年度に行い、二〇一五年度にも実施した。その他、埋蔵文化財研究集会（一九九三年）、条里制研究会大会（一九九四年）、国際文化交流シンポジュウム（一九九五年）、文化財修復学会（一九九六、二〇〇四年）、鉄器研究会（一九九八年）、中世シンポジュウム（一九九九年～二〇〇五年）等々、毎年一つないしは二つ以上の集会を行った。

世間では「奈良大はお祭り好き」との噂も流れたが、これは水野先生の思惑でもあった。学会・研究会等を大学で開催すれば、大学（文化財学科）の知名度もあがる。また、学生達は著名な先生方の姿が見れるし、学会の雰囲気を味わい、学術的な刺激を受けることも出来る。そして、大会の実務的な経験は将来に生かされるし、学生同士の連帯感も生まれるのである。今思えば、かけがえのない教育的指導であったと思う。

また、京都市埋蔵文化財研究所辻純一さんの依頼を受けて、近畿埋文野球大会の会場提供を一〇年ほどお世話した。近畿の埋文行政機関が約一〇組ほど集って熱闘を繰り返し、奈良大学も学生を主体とした臨時チームを結成して参加させていただいた。終了後は実習室で和やかな懇親会を実施し、他機関の人々と交流することが出来た。その中には結婚したカップルも登場した。

一九八一年度から年に一度、卒業生にも呼びかけて研究会＋親睦会を開催してきた（考古学研究室総会）。新旧教員、卒業生、在学生の研究成果を発表する会として、また三者の交流を図る会として実施した。山陵キャンパスに移ってからも毎年開催し、筆者は雑務を担当した。一時期中断したこともあったが、形を変えて継続している。二〇二〇年度からは、「山陵の丘研究会」として新たに始動している。今後の活動が楽しみである。

また、年に一度では十分な発表や交流もできないと言う卒業生の積極的な意見を反映させて、一九八四年度以降は月に一度「考古学研究室研究交流会（例会）」を開催した。主に四回生が調査報告や研究発表を行い、卒業生を交えて議論し交流した。他大学では月例会等を頻繁に開催しており、奈良大学も活発的な研究をしようというものであった。新しい大学であるため卒業生は皆若く、考古学に対する熱い思いをもっていた。これも文化財学科発展の一躍になったことは間違いないが、二〇〇〇年以降はほぼ休店状態となった。

かつては考古学実習室では、毎週金曜日は掃除の日と決め、実習室や共同研究室・講義室の掃除、他の部屋のゴミ回収を行っていた。さらに長期休暇の前には必ず大掃除を行った。積極的に参加する学生が多くいて、各部屋はいつもきれいな状態であった。また、毎月理由をつけて教員と学生が一緒になって懇親会を開催した。新入生歓迎会から始まり、施設見学会、非常勤講師を囲む会、七夕、前述の大掃除等々である。その責任者は宴会部長と呼ばれ、まわりから尊敬されていた。専攻やゼミ、回生を超えて熱心に交流したが、今日の学生気質は変化し、かつてのような賑わいが見られなくなったのは残念である。

四、思い出の研修旅行

考古学の教員が学生と一緒に各地を訪問する研修旅行（考古学研究室旅行）は、一九八〇年度からを毎年行ってきた。ゼミの枠を超えて一・二泊で各地を回った。思い出深いのは、水野先生お薦めの香川県訪問である。恒例の石清尾山古墳群、善通寺、金比羅神社、護国神社には数回訪れた。水野先生が高校生時代に訪れた各所での武勇伝は毎回聞いている。

その他にも、広島、岡山、鳥取、島根、山口、京都北部、福井、石川、富山、愛知、静岡、長野、千葉、徳島、愛媛、大分、熊本県の遺跡や博物館、文化財

センター等を訪れた。夕方までは考古学の勉強をし、夜は親睦会へと移る。教員と学生が親しく交流した楽しい旅行であったが、二〇〇八年頃から停滞した。中でも記憶深いのは、二〇〇五年度に愛媛大学を表敬訪問し、交流会を行ったことである。下条信行・村上恭通先生他の出迎えを受け、施設見学の後、親睦会場へと移った。ところが、知らないうちに酒井龍一先生の音頭で飲み比べ大会が始まり、倒れる者が続出した。ありがたいことに、奈良大学は勝利を手にしてバスに乗り込み、船着き場に移動した。今日ではゼミ単位の旅行でも参加希望者はとんどなく、時代の移り変わりを感じる昨今である。

文化財学科では、一九八〇年代から海外研修旅行を行ってきた。中国から世界各地へと訪問国は拡大していった。筆者は一九九四年度にシリア・ヨルダン旅行（泉拓良・酒井龍一先生同行）に初参加し、翌年度には韓国（西山要一先生同行）を訪問した。その後、イギリス・フランス（泉拓良・西山要一先生同行）、イタリア・ギリシャ（泉拓良・西山要一先生同行）、エジプト（酒井龍一先生同行）、イタリア（西山要一・坂井秀弥先生同行）へ行き、再び韓国へ二回（①水野正好・東野治之先生、②坂井秀弥・小山田宏一先生同行）、そして中国二回（①西安・洛陽：坂井秀弥・魚島純一先生、②南京・蘇州・上海：坂井秀弥・小山田宏一・魚島純一先生同行）、ベトナム・カンボジア（坂井秀弥・吉川敏子・魚島純一先生同行）、インド（吉川敏子・魚島純一先生同行）へも行くことができた。いずれも一週間から長くても二週間以内であるが、未知の世界を垣間見ることも出来た。同一の訪問場所でも新た発見があり、感動を覚えることも少なくなかった。

個人的に初めて海外に訪れたのは一九八〇年三月である。田辺昭三先生を団長とする訪中団の一員として、北京・西安を訪れた。広大な黄土地帯は日本とまったく違う風景であり、文物の質量やスケールの大きさに驚嘆した。その後中国には、一九八五年八月に、西谷正先生を団長とする中国吉林省（瀋陽～集安）訪中団に参加し、開放されて間のない高句麗の都を散策した。そして二〇〇九年二月には、韓国・ＨＡＮＳＨＩＮ大学校博物館の研究員達と、中国の大連・旅順を訪問した。さらに二〇一五年八月には、李澤求さんの企画で韓国の研究者や坂井秀弥先生とともに瀋陽～桓仁～集安を訪門した。桓仁の五女山城は、三〇〇ｍ以上の比高差があり、崖のような道を死ぬ気で登った。また、三〇年ぶりの都市化した集安の変貌ぶりには言葉も出なかった。

韓国を初めて訪問したのは、一九八三年である。五月の連休を利用して数名の仲間達とソウル～慶州～釜山を訪れた。軍事政権下で緊張した旅行であったが、須恵器の源流を探りつつ博物館を見学した。三国時代の文物だけでもその質量に圧倒された。釜山大学校博物館では、申敬澈先生や研究員の方々の歓迎を受け、意見交換をした。研究員の方々とは今日でも交流が続いている。

その後韓国には、一九九〇年以降ほぼ毎年渡韓し、各地の遺跡や博物館、研究所等を訪問して資料調査をし、研究者達と交流してきた。後述するように二〇〇八年度には、一年間在外研修で韓国に滞在することが出来、窯跡や陶質土器、日韓交流史の基礎資料を調査した。

その他、観光ではあるが二〇一六年には台湾一周旅行をした。また同年にはＪＩＣＡの派遣隊でラオス・ビエンチャンで博物館建設の指導をしていた渡邊淳子さんを訪ね、市内の名所・旧跡、博物館等を見学した。二〇一八年にはドイツ留学中であった中村大介さんを頼ってベルリンを訪れ、博物館島をゆっくりと見学・観光した。いずれも貴重な体験であった。

五、博物館建設と展示活動

山陵キャンパスに移転して間もなく、奈良大学博物館建設構想が立ち上がった。現在の大学入り口にある守衛室横の駐車場に、二階建て総面積約二〇〇〇

㎡の建築が計画された。館のメインテーマは奈良にふさわしい「木の文化」とし、展示設計も終盤に近づいていた。筆者は泉拓良先生の指導の下、常設展示の専門部会に加わって展示構想を検討・作成したが、一九九五年に阪神淡路大震災が発生し、施設の耐震・免震を全面的に見直すことになり、しばらく開店休業状態になった。その後残念なことに、学長や理事長の交代もあり、建設構想はまったく語られなくなってしまった。建設中止である。

壮大な博物館建設の夢が頓挫した後は、活発な動きはなかった。しかし、学芸員資格科目である博物館実習を行うための施設不足や体制不備は慢性的に存在していた。当時は、文化財学科の各実習室、地理学科・史学科の実習室、和室を間借りして実習を行っていた。その後、通信教育学部開設の計画がもち上がり、新棟を建設をすることになった。初期の博物館建設の委員でもあった史学科鎌田道隆先生（元学長）は、早速上層部に博物館実習のための施設（展示室・実習室・収蔵室等）の併設を要求した。上層部は博物館には不理解であったが、博物館実習施設であれば可能ということになり、通信教育部棟の地下フロアー全面と、一階の一部（展示室・学芸員室）を確保した。筆者はその時、鎌田先生と共に実習施設の間取りや仕様について検討し、建設会社とも協議した。当初は展示室を三階にするように要望したが却下された。そのため、現展示室の北側部分は上階にテラスがあるため、雨天時には湿度の上昇が目立つ。

また、建物が出来上がってみると、当初の仕様とは異なった教室風の部屋に仕上がっており愕然とした。ただし、展示室ガラスケースの奥行きとガラスの幅を二種類の異なった仕様でお願いした部分は採用されていた。実習生や利用者の目線で、比較をすることを考えたのである。建物が完成した後は、「枯らし」もままならず、即刻、備品や実習教材の配置・保管、収蔵室の配置や管理を検討した。附属高校（秋篠・山陵遺跡）の発掘調査資料は学園所蔵のため倉庫に収蔵することにし、民俗や考古の資料は保管室に納めることにした。

通信教育学部開設の二〇〇五年には、開設記念展をして展示室の存在をアピールした。初回は、鎌田先生が「奈良へのいざない～絵図にみる旅と街道～」展を開催し、柿落しをした（四月一日～九月一五日）。第二回は、筆者が「秋篠・山陵に生きた人々～奈良大学附属高校内遺跡の調査～」展（一二月三日～二〇〇六年五月二〇日）を開催した。展示に必要な用品も一から準備し、試行錯誤を重ねて手作りの展示が始まったのである。

次に筆者が行った展示は、二〇〇七年一月七日～二〇〇八年四月一九日の期間に「黄泉国へのいざない～奈良市歌姫赤井谷三号横穴の調査～」展である。二〇〇五年度に奈良市教育委員会と共同で調査した遺跡の成果展であった。調査に参加した学生・院生の計二四名の協力があり、段ボール箱を切って玄室を復元し、分かりやすいビジュアルな展示を目指した。展示の終了時期は筆者の在外研修期間に入っていたため、急いで撤収して韓国へ向かった。

二〇一五年には坂井秀弥先生が中心となって「発掘された古代国家」展（三月一六日～五月二三日）を開催した。全国の卒業生の協力を得て企画し、古代国家に関連する重要な資料を借用して展示した。筆者は福岡県や滋賀県からの資料の搬送や図録の一部を担当した。

同年、一〇月一七・一八日には日本考古学協会奈良大会を本学で開催した。それに合わせて、一〇月一三日から～二〇一六年五月七日の期間、「縄文から中世の秋篠・山陵遺跡」展を開催した。二〇〇五年度とほぼ同じ内容であるが、図録も製作して充実させた。このように、微力ではあるが奈良大学博物館の企画展開催の協力をし発展に努めた。

いずれの展示においても多くの院生や学生の協力があり、学生達は博物館実習でも学べない貴重な体験をした。ゼミ生に限定することはなく、広く公募をして協力を求めた。専攻・回生の異なる学生が参加してくれて、色んな提案もしてくれた。その交流は今でも続いているのがありがたい。

二〇〇七年度には博物館実習施設から、奈良大学博物館へ昇格した。前年に近隣大学の博物館が博物館法にいう「相当する施設」（以下相当施設とする）として承認されるやいなや、本学も相当施設への準備をしろという業務命令が下ったのである。通信教育学部開設時に相当施設への申請を強く提言はしたが、即座に却下された経緯がある。いずれにしても、近隣大学の影響は大きく、お礼を言わなくてはならないだろう。

相当施設承認後は、館長、学芸員、事務局等の組織、館蔵品目録等の整備が必要である。これ以降、その担当は栗田美由紀先生（学芸員兼務）に移り、館長の下に博物館委員会が組織され、事業の企画・運営を行うことになった。以後筆者は博物館を離れ、専ら学芸員資格科目を担当することになる。

六、須恵器研究と韓国在外研修

大学就職後も須恵器研究を継続して行ってきた。田辺昭三先生の研究を基礎にして、全国の初期須恵器や窯跡資料を調査しながら、日本における須恵器生産の開始と展開を考えた。須恵器生産は、五世紀代に倭の五王が中国南朝へ朝貢して称号を授与されたこととも関係し、倭国内の政治的秩序形成と手工業生産の展開が無関係ではないことを論じた。

中でも一九八〇年代後半から行われた、陶邑窯・大庭寺遺跡（ＴＧ２３１・２３２窯跡）の調査は衝撃的であった。日本で未だ見たこともない須恵器が大量に出土したのである。筆者は、毎月と言っていいほど調査現場を訪問し、調査終了後は、整理事務所に頻繁に通い実態を調査した。問題は大庭寺遺跡の相対的な時期であった。それまで最古と考えられていた一群（ＴＫ73型式）よりも、さらに一段階古くなることを確認する必要があったため、形態や文様・技法の整理を行い論証した。そしてその後、須恵器は急速に日本化していき、器種組成や形態・技法が簡素化されて合理化に向かうことを、「ＴＫ73型式の再評価」として、図らずも恩師の論文集『田辺昭三先生古稀記念論文集』に掲載した（二〇〇二年八月）。

前述のように、須恵器の故地である朝鮮半島に初上陸した一九八三年以降、頻繁に渡韓した。須恵器の源流を探す目的は、未だに達成していないが、韓国の窯業遺跡や古墳文化、そして日韓交流史（日本の渡来文化）に関心もって訪問した。幸いにも二〇〇八年度に一年間、奈良大学の在外研修制度で韓国・ＨＡＮＳＨＩＮ大学校博物館で資料調査・研究を行うことが出来た。同大学校の李南珪先生や權五榮先生、李亨源・韓志仙・文京徳の先生方にお世話になり、暖かく迎えていただいた。同博物館は、百済の都であったソウル市風納土城の再調査を行っており、遺跡の発掘にも参加させていただいた。ここでは日本では見かけない重厚な建造物とともに、中国・南朝から下賜された大量の陶磁器類が出土し、ゆっくりと観察する機会をいただいた。

また韓国では、窯業遺跡の基礎資料収集を行った。そして、ことある毎に国内の調査現場や研究会にも同行させていただいた。さらに国内の主要な博物館や遺跡公園、さらに民俗村や芸術村等も訪れた。実に充実した一年間であり、たくさんの研究者達とも交流も出来たし、韓国の文化や料理も堪能した。

一方、韓国滞在中には、頻繁に講演・研究発表を依頼された。日韓の窯業生産について十回以上も講演した。その一つは、忠南大学校百済研究所での公開講座の発表であり、同内容はその後、学術雑誌『百済研究』へ掲載していただいた。また、（社）韓国埋蔵文化財調査研究機関協会が開催した文化財研究員の研修において、「日本の窯跡調査法と須恵器研究」についても講義した。

韓国での成果は、「韓国の土器窯集成」、「日韓の窯業遺跡の比較検討」等を発表したが、まだまだ不十分である。これまでの多くの研究者との交流に感謝しつつ、今少し進めて行かなくてはならないと考えている。

おわりに

考古学に加えて、一九九八年からは学芸員資格科目と文化財博物館学を受け持つことになった。学芸員資格科目は、一九七六年度に山中一郎先生が担当して以来、泉拓良先生に引き継がれ、その後筆者が受け持つことになった。代々、文化財学科（考古学）教員が引き受けることが伝統になっていたのである。

大学で学芸員資格は取ったものの博物館での勤務経験もなく、博物館関係の授業は一からの挑戦であった。そのため、当時大阪府立弥生文化博物館の館長をされていた金関恕先生にお願いして、同館で半年間、奈良大学の国内研修制度を利用して博物館業務の研修をさせていただいた。展示の企画から開館～搬出、図録の作成等々、繁忙な学芸員業務を体験することが出来た。そのご縁で同館特別展の図録に拙文を掲載させていただいた。新たに担当した資格科目は博物館概論と博物館実習である。博物館実習で印象的なのは、帝塚山学院大学（中尾芳治先生）、皇學館大学（岡田芳幸先生）と共同で夏休みに行った洋上実習（九州方面の博物館見学）である。二〇一九年度で終了したが、二六年の間、大学間の交流や情報交換が出来てありがたかった。また、学科の専門科目として文化財博物館学講読と文化財博物館学演習・特殊講義が新設され、担当した（二〇二一年度以降閉講予定）。弥生文化博物館で研修はしたものの、新たな授業科目の準備は片手間で出来るものではなく、授業の準備に追われた。

こうした経緯もあって、奈良大学博物館構想や博物館実習施設建設の設計にも関わり、奈良大学博物館の実現を夢見たが、最小限に留まった。この頃から、日本博物館協会大会や全国大学博物館学講座協議会（全博協）にも参加させていただいた。同会の全国大会や西日本部会大会では、分野の違う多くの研究者に出合い、多種多様な博物館学研究に接し、多くの刺激を受けた。二〇一七年度から二年間は、同会西日本部会の会長も務めさせていただいた。博物館学を担当して以降、博物館の意義や役割、新たな博物館像を真剣に考えるきっかけになり、世界が広がった。歴史博物館を題材とした論考も一部まとめた。

新しく赴任された先生方や学生の中には、筆者は博物館学が専門であると見られている。これは光栄なことではあるが、考古学の研究を基本的に進めてきた立場からすると、やや寂しい気持ちも捨てきれない。考古学研究を基にして博物館学を担当・研究してきたというのが的を得た表記であろう。

奈良大学での四〇年間は実に充実した時間であった。もとより浅学菲才な身であり、かつ横着者で面倒なことが嫌いな筆者に、大学の教員が務まるとは思ってもいなかった。多くの皆さんに多々迷惑をかけたことは、疑いのない事実である。水野正好先生を始めとして、先輩教員の暖かいご指導や援助があって、勤務させていただいた四〇年間であった。

四〇年の間には、教職員組合や教職員の野球部、ローンテニスクラブ（現在は両クラブとも消滅）の活動にも参加した。事務局や学部・学科の枠をこえ、学内外で親しくさせていただいた。そのご縁もあって事務職員の方々には、多くのご支援をいただき、楽しく勤務させていただいた。

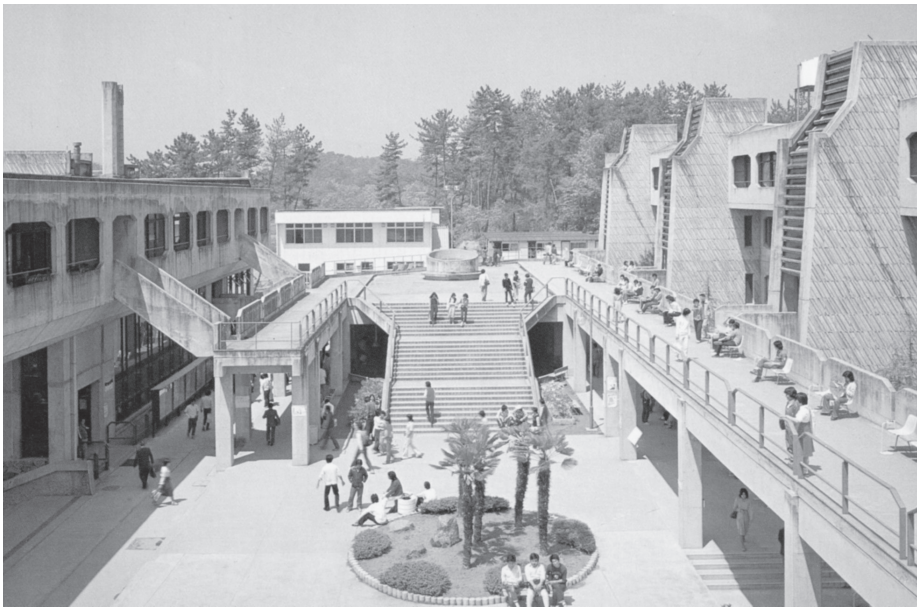
このように、多くの方々からお世話いただき、努めさせていただいた四〇年間であった。心よりお礼を申し上げます。

最後に奈良大学の四〇年間には、次の科目を担当した（開講時期・期間は不同）。考古学実習、考古学講読、考古学演習、東アジア考古学、世界考古学、考古学特殊講義、文化財学研究法、文化財科学実習、保存科学実習、文化財博物館学演習、文化財博物館学講読、文化財博物館学特殊講義、博物館概論、博物館資料論、博物館保存論、博物館実習、基礎演習、文化財演習。オムニ式では奈良文化論、世界遺産学概論、世界遺産文化財学特殊講義、教職演習、学問と社会、である。記録に留めておきたい。

植野浩三先生ご経歴

一九五五年七月二八日　広島県豊田郡安芸津町（現東広島市）木谷で生まれる
一九六七年三月　広島県安芸津町立木谷小学校卒業
一九七一年三月　広島県安芸津町立安芸津中学校卒業
　四月　広島県立竹原高等学校入学
一九七四年三月　広島県立竹原高等学校卒業
　四月　奈良大学文学部史学科入学
一九七八年三月　奈良大学文学部史学科卒業
　四月　神戸市池上遺跡調査団調査員（一九八〇年三月まで）
一九八〇年四月　奈良大学文学部文化財学科助手
一九八七年四月　兵庫県中町史執筆委員（一九九一年三月まで）
　五月　長野県豊科町・東山窯跡群指導委員（一九九九年一二月まで）
一九九八年四月　奈良大学文学部文化財学科専任講師
　奈良大学国内研修制度により、大阪府立弥生文化博物館にて研修する（一九九八年九月まで）
二〇〇〇年四月　日本文化財科学会評議委員会委員（現在に至る）
　（二〇〇二～二〇〇五年度理事会幹事、二〇〇六～二〇〇七年度事務局長）
二〇〇〇年度　奈良教育大学非常勤講師（遺物論、集中講義）
二〇〇一年度　奈良教育大学非常勤講師（考古学、博物館実習）
二〇〇二年度　奈良教育大学非常勤講師（博物館実習、二〇〇四年度まで）
二〇〇五年四月　奈良大学文学部文化財学科助教授
　兵庫県丹波市文化財審議委員会委員、同市歴史民俗資料館運営委員会委員（現在に至る）
二〇〇七年四月　准教授（役職名変更）
二〇〇八年四月　奈良大学在外研修制度により、韓国・ＨＡＮＳＨＩＮ大学校博物館（特別研究員、訪問教授）にて研修する（二〇〇九年三月まで）
二〇一四年四月　大阪教育大学非常勤講師（博物館概論、前期）
　京都産業大学非常勤講師（考古学入門　前・後期　二〇二一年三月まで）
二〇一六年四月　奈良大学文学部文化財学科教授
　丹波市黒井城跡整備委員会委員（現在に至る）
二〇一七年一〇月　全国大学博物館学講座協議会西日本部会会長（二〇一九年九月まで）
二〇二一年三月　奈良大学定年退職（六五歳）

宝来キャンパス
全景（1980年頃）



宝来キャンパス
中央広場

宝来キャンパス
文化財実習棟

植野浩三先生著作目録

［著書］

共著『考古学調査ハンドブックス』1　野外編　雄山閣出版　一九八四年一〇月（「本調査」、「発掘法」担当）

共著『図説発掘が語る日本史』4　近畿編　新人物往来社　一九八五年一二月（「その他の主要遺跡解説」担当）

共著『論集 武具』学生社　野上丈介編　一九九一年（「特異な小札を配する眉庇付冑について」再録）

共著『中町史』本篇　兵庫県多可郡中町　一九九一年（「第1章　原始の中町」、「第2節　古代寺院の成立」担当）

共著『地方豪族と畿内政権－運ばれた須恵器は何を語るか　第2回三ツ城古墳シンポジウム記録集』東広島市教育委員会　一九九六年（「西日本の初期須恵器」担当）

共著『世界遺産と都市』奈良大学文学部世界遺産コース編　風媒社　二〇〇一年六月（「アジアの都市　ソウル－歴史ただよう現代都市」担当）

共著『博物館実習マニュアル』全国大学博物館講座協議会西日本部会編　芙蓉書房出版　二〇〇二年三月（「第7節　史跡・名勝・遺跡」担当）

共著『ヤマト王権と渡来人』大橋信也・花田勝広編　サンライズ出版　二〇〇五年五月（「渡来人と手工業生産の展開－陶邑窯を中心として－」再録）

共著『浄土寺古墳群を考える－敦賀半島周辺の石棚と海の民　美浜町歴史シンポジウム記録集2』美浜町教育委員会　二〇〇五年九月（「古墳時代後期の畿内と北陸」担当）

共著『日本古代史大事典』大和書房　二〇〇六年一月（「ウワナベ古墳」担当）

共著『博物館学事典』全日本博物館学会編　雄山閣　二〇一一年八月（「ガス・クロマトグラフィー」担当）

共著『新時代の博物館学』全国博物館学講座協議会西日本部会編　芙蓉書房出版　二〇一二年三月（「博物館の種類、博物館を支える仕組み、博物館組織と博物館を支える人々」、「博物館資料の種類と保存法、人文系の保存と方法」、「資料の梱包と運搬方法」、「人文系博物館における資料保存の実態と実例」、「人文系の展示」担当）

［論文］

「西日本の初期須恵器－三ツ城古墳の須恵器を中心にして－」『奈良大学紀要』第9号　一九八〇年一二月

「特異な小札を配する眉庇付冑について」『奈良大学紀要』第10号　一九八一年三月

「須恵器瑙の製作技術」『文化財学報』第1集　一九八二年三月

「須恵器蓋杯の製作技術」『文化財学報』第2集　一九八三年三月

「韓式系土器についての予察」『奈良大学紀要』第12号　一九八三年一二月

「前方後円墳の築造方法（1）－鳥取県西穂波16号墳を例にして－」『文化財学

報』第3集　一九八四年三月
「盗掘された天皇陵の実態」『歴史読本』第32巻12号　一九八七年六月
「初期須恵器窯の解釈をめぐって」『文化財学報』第6集　一九八八年三月
「初期須恵器窯の系譜について－大蓮寺窯跡を中心にして－」『文化財学報』第9集　一九九一年三月
「陶邑・大庭寺遺跡と吹田32号窯」『韓式系土器研究』Ⅲ　一九九一年
「日本における初期須恵器生産の開始と展開」『奈良大学紀要』第21号　一九九三年三月
「初期須恵器窯総論－須恵器生産の開始と展開－」『古墳時代における朝鮮系文物の伝播』第34回埋蔵文化財研究集会　一九九三年八月
「埴輪生産と須恵器工人－奈良県ウワナベ古墳の須恵器を中心にして－」『文化財学報』第11集　一九九三年三月
「古墳時代中期の手工業生産と政治秩序－須恵器生産の展開を中心にして－」『文化財学論集』一九九四年八月
「兵庫県千種川中・下流域の初期須恵器」『韓式系土器研究』Ⅴ　一九九四年一〇月
「最古の須恵器型式設定の手続き」『文化財学報』第13集　一九九五年三月
「堂山古墳群と久米田古墳群出土須恵器の検討」『文化財学報』第14集　一九九六年三月
「区画溝と周溝墓－滋賀県五村遺跡の調査成果をもとに－」『文化財学報』第15集　一九九七年三月
「5世紀後半代から6世紀前半代における須恵器生産の拡大」『文化財学報』第16集　一九九八年三月
「須恵器生産の展開」『中期古墳の展開と変革－5世紀における政治的・社会的変化の具体相（1）』第44回埋蔵文化財研究集会　一九九八年八月
「頭飾り－櫛への想い」『卑弥呼の宝石箱－ちょっとオシャレな弥生人』大阪府立弥生文化博物館　一九九八年一〇月
「往生院所蔵の眉庇付冑・短甲について」『岩瀧山往生院六萬寺史』上巻－考古編　往生院六萬寺　一九九九年五月
「初期須恵器窯跡の構造的特徴」『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会　一九九九年一一月
「大和における須恵器窯跡」『総合研究所所報』第8号　奈良大学総合研究所　二〇〇〇年三月
「大和における須恵器生産の特質」『文化財学報』第18集　二〇〇〇年三月
「TK73型式の再評価－高杯の消長を中心にして－」『田辺昭三先生古稀記念論文集』田辺昭三先生古稀記念の会　二〇〇二年八月
「日韓古代窯跡調査の動向」『総合研究所所報』第11号　奈良大学総合研究所　二〇〇三年三月
「陶邑と渡来人」『日本考古学協会　二〇〇三年度滋賀大会資料集』日本考古学協会二〇〇三年度滋賀大会実行委員会　二〇〇三年一〇月
「陶邑と渡来人」『日本考古学協会　二〇〇三年度滋賀大会発表資料』二〇〇三年一〇月　日本考古学協会
「渡来人と手工業生産の展開」『文化財学報』第22集　二〇〇四年三月
「韓国博物館の現状」『総合研究所所報』第13号　奈良大学総合研究所　二〇〇五年三月
「世界遺産と博物館の役割」『文化財学報』第23・24合併集　二〇〇六年三月
「古市・百舌鳥古墳群出土の須恵器」『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』二〇〇八年三月
「韓国の土器窯集成（1）　京畿道・忠清道編」『文化財学報』第27集　二〇〇九年三月

「馬韓・百済の土器窯と日本須恵器窯の比較研究」『百済研究』第51輯　韓国・忠南大学校百済研究所（韓国文）　二〇一〇年二月
「初期須恵器窯の様相－日韓土器窯の比較検討」『第22回東アジア古代史・考古学研究会交流会（予稿集）』　二〇一〇年一二月
「韓国の土器窯集成（2）　全羅道編」『文化財学報』第31集　二〇一三年三月
「初期須恵器の定式化と日本化－器台の消長を中心にして－」『私の考古学－丹羽佑一先生退任記念論文集』丹羽佑一先生退任記念事業会　二〇一三年一二月
「韓国の土器窯集成（3）　慶尚道編」『文化財学報』第33集　二〇一五年三月
「日韓鉄・土器生産研究の覚書」『故孫明助先生追慕論文集』故孫明助先生追慕論文集刊行委員会　진인진　二〇一五年八月
「日・韓前方後円墳築造方法の覚書－鳥取県晩田山3号墳の再検討をかねて－」『構築と交流の文化史－工樂善通先生傘寿記念論集－』雄山閣　二〇一八年一二月
「陶邑窯・ＯＮ四六段階の覚書」『文化財学報』第38集　坂井秀弥先生退職記念論文集　二〇二〇年三月
「陶邑窯・ＴＫ二一六型式の覚書」『柳本照男さん古稀記念論集－忘年之交の考古学－』柳本照男さん古稀記念論集刊行会　二〇二〇年一二月

［報告書・翻訳］

「出土遺物」『小梨城跡発掘調査報告書』広島県竹原市・小梨城跡発掘調査団　一九七八年三月
『三保遺跡発掘調査報告書』鳥取県東伯町教育委員会　一九八一年三月
「出土遺物」『大高野遺跡発掘調査概報』東伯町教育委員会　一九八二年三月
共著『妻波古墓発掘調査報告書』鳥取県大栄町教育委員会　一九八五年三月
「韓式系土器の名称」「韓式系土器出土遺跡の概要　茨田安田遺跡」『韓式系土器研究』Ⅰ　一九八七年二月
共著「多可寺遺跡」『兵庫県史』考古資料編　一九九二年三月
共著『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書』（1）－兵庫県氷上郡市島町－　兵庫県氷上郡教育委員会　一九九四年年三月
共著「兵庫県ボラ山1号墓発掘調査概要報告」『文化財学報』第12集　一九九四年三月
共著『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書』（2）－兵庫県氷上郡春日町－　兵庫県氷上郡教育委員会　一九九五年三月
共著『ブラ山・ボラ山－青垣工業団地建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』兵庫県青垣町・氷上郡教育委員会　一九九五年三月
「第12回大会研究発表をふりかえって－産地－」『日本文化財科学会会報』第30号　一九九五年一〇月
共著「兵庫県見長大歳神社古墳測量調査報告」『文化財学報』第14集　一九九六年三月
共著『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書』（3）－兵庫県氷上郡柏原町－　兵庫県氷上郡教育委員会　一九九六年三月
共著『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書』（4）－兵庫県氷上郡青垣町－　兵庫県氷上郡教育委員会　一九九七年三月
共著『五村遺跡－いきがいセンター建設に伴う発掘調査報告書』滋賀県虎姫町教育委員会　一九九七年一月
共著『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書』（5）－兵庫県氷上郡山南町－　兵庫県氷上郡教育委員会　一九九八年三月
共訳『金海大成洞古墳群』Ⅰ（慶星大學校博物館研究叢書第4輯　慶星大學校博物館　二〇〇〇年二月）大阪朝鮮考古学研究会　二〇〇一年二月

共著『筑摩東山　上ノ山・菖蒲平窯跡群発掘調査報告』長野県豊科町教育委員会　一九九九年一二月

共著『妻木晩田遺跡－洞ノ原地区・晩田山古墳群発掘調査報告書－』淀江町教育委員会　二〇〇〇年三月

「櫛とその魔力」『第六話　昔のファッションを復元する』泉南市・泉南市教育委員会　二〇〇一年三月

共著『多哥寺遺跡－一九八〇～一九八二年度発掘調査報告書』奈良大学文学部考古学研究室・兵庫県中町教育委員会　二〇〇一年三月

共訳『金海良洞里古墳文化』（東義大學校博物館学術叢書7　東義大學校博物館　二〇〇〇年六月）大阪朝鮮考古学研究会　二〇〇一年八月

共訳『金海大成洞古墳群』Ⅱ（慶星大學校博物館研究叢書　第7輯　慶星大學校博物館　二〇〇〇年六月）大阪朝鮮考古学研究会　二〇〇二年五月

共訳「墳丘墓の認識」『古文化談叢』第54集　二〇〇五年一〇月　大阪朝鮮考古学研究会（李盛周『韓国上古史學報』第32号　二〇〇〇年所載）

「日本における須恵器生産の開始と渡来人」『全北大学人文大学ＢＫ21作業団国際学術大会資料集』二〇〇八年一月

共著『黄泉国へのいざない』奈良大学博物館二〇〇七年冬季企画展　図録　二〇〇八年一月

「日本の窯跡調査法と須恵器研究」『二〇〇八年度第5回埋蔵文化財調査研究員教育資料集』（社）韓国埋蔵文化財調査研究機関協会　二〇〇八年八月

共著『瀬戸古墳群発掘調査報告書』奈良大学文学部考古学研究室　二〇一〇年三月

翻訳「梁山虎渓洞三国時代土器窯の復元と焼成実験」『韓式系土器研究』Ⅻ　二〇一二年八月（韓国・土器窯復元実験研究会『第33回韓国考古学会全国大会』二〇〇九年所載）

「奈良大考古学のあゆみ」『奈良大学法人創立90周年・文化財学科創設35周年記念企画展　発掘された古代国家』奈良大学博物館　二〇一五年三月

共著『縄文から中世の秋篠・山陵』日本考古学協会二〇一五年度奈良大会企画展 図録　二〇一五年一〇月

［その他］

共著『日本発見』22　古墳の謎　暁教育図書　一九八一年四月（「古墳10の謎」「古墳の歴史」、「略年表」、「ことばの豆知識」、「全国古墳ガイド」、「巨大古墳」担当）

「やきものの源流を追って」『奈良大学通信』第3号　一九八六年一二月

「神武天皇陵－ミサンザイ古墳－」『歴史読本特別増刊事典シリーズ19　天皇陵総覧』新人物往来社　一九九三年七月

「渡来系文物・須恵器の研究と発掘調査」『奈良大学通信』第10号　一九九四年二月

「日本の須恵器と陶質土器」『一九九五年度奈良大学文学部文化財学科海外研修旅行報告』奈良大学文学部文化財学科　一九九六年三月

「文化財学入門　奈良大紙上教室」計20回　新聞連載　毎日新聞奈良版　一九九六～一九九八年

「Ｖ＆Ａ博物館とその周辺」『一九九七年度奈良大学文学部文化財学科海外研修旅行報告』奈良大学文学部文化財学科　一九九八年三月

「陶器作りの始まり」『奈良大学おもしろミニ講座』（下）　二〇〇三年一〇月

「田辺昭三先生のご逝去を悼む」『考古学ジャーナル』５４２　二〇〇六年四月

「奈良大学考古学講座　須恵器のいろは」①～⑤『月刊大和路　ならら』二〇一〇年八月号～二〇一一年三月号